

ヘッセ受容の問題点

藤 井 啓 行

1

ヘルマン・ヘッセ受容の、日本における従来のあるかたは、或意味での特異性の故に、わが国の文化的風土や日本人の心性を検討するうえでも甚だ興味ある研究対象であり、現段階におけるこの方面の資料のまだ不充分であることを憂いながらも、諸外国におけるヘッセ受容の、歴史ならびにその現況との比較において、今回は私はこの問題に新しい側面から照明を当ててみたいと考えた。

諸外国のうち、これまでもBRDや米国の事情はわが国にも多少は紹介されてきているが、勿論それとても充分とは言いがたく、ましてや、その他の諸国の状況に関しては、これまで殆んど全く知る手がかりも得られなかったと言ってよかろう。私は現時点で得られる限りの資料を踏まえて、それらの状況や将来の展望を概観し参考にしつつ、日本におけるヘッセ受容にひそむさまざまな問題点を掘り起こし、それによって、わが国における外国文学の受けとめかた考察の一端にもしたいと思うのである。

2

まず初めに、問題の中心地であるBRDならびに米国の近況についての検討からはいりたい。

1970年代を迎えてBRDでは、ペーパーバックスを主体にしつつヘッセ

の作品が飛躍的な販売量を示すようになり、研究文献の出版点数も目を眩らせるものがあり、現在もその勢は衰退を見せず、これまでの受容史の中で最大の、「ヘッセ・ルネサンス」を迎えたものと判断することができる。特に注目されるのは、そのさい新たに「ロマン主義的アナーキスト」¹としての彼の本質に、目立って焦点が合わされ始めたことであろう。政治的・反動的な偏見が、過去においてしばしばヘッセの評価に強く作用してきたことは確かな事実であり、そのような背景を個々に具体的に考察していくことが、ヘッセ受容が従来たびたび経験し、また今なお強くその尾を引いている受難²の、本質的な理解のために是非とも必要であると考えられる。この観点から私は、新たな編集による、現在なお逐次刊行中のヘッセ書簡集（数多くの識者たちとの往復書簡集を含む）や、また各作品についての、それらの発表時期における時評等は勿論のこと、歴史的・時代的背景や個人的環境などにも、能う限り目を配るように心がけた。

私にとってその間、たとえばヘッセとドイツ・ロマン主義との関係が、またしても大きくクローズ・アップされてくるのであった。これに関しては、アメリカのゲルマニストであるジオルコウスキー（Theodore Ziolkowski）の行なった、歴史上のロマン主義と類型論的ロマン主義という見方³が、新たに参考になり、この両面から見て同思潮とヘッセとの深い連関を考え、ホーフマンスタールはもとよりのこと、これまでアンチ・ロマン主義者とのみ目されることの多かったブロッホとも比較・検討することを私は始めた。またその際、ロマン主義との関わりにおいて、死に対するヘッセの把握のしかたも、当然ながら大きな問題を提起することになった⁴。

ついでながら、他のドイツ語圏諸国における受容状況に関しては当然DDRを逸し得ないが、この国ではヘッセはトーマス・マンと併称されることが多く、特に、誠実なヒューマニストであり、また偉大な平和の友であるとして、総じてかなり高い評価を受け続けてきているようである。この

国の事情を紹介する文献で最近のものとしては、論者として最適任の一人と思われるプファイファー（Martin Pfeifer）の論考がある。ただDDRのヘッセ受容には、政治的・文化的等の諸事情から、BRDに比較してかなりの立ち遅れが目立つようであり、プファイファーによれば、ヘッセの作品に関して、マルクス主義的ゲルマニストたちによるかなりの程度に包括的な批判的分析は、若干の例外を除いて、まだ殆んど行なわれていないようである⁵。

米国が今回の「ヘッセ・ルネサンス」の源流であることはもはや周知のところとなったが、それに関わったのは、読者・研究者・出版人よりなる三者の、言わば共同作用であった。その際ことに目をひくのは、ヘッセへの文学評価において、ドイツ本国の講壇ゲルマニスティクが全く影響を与え得なかったことである⁶。国情の相違とは言いながら、この点は過去におけるわが国一般の場合とほぼ完全に対照的であって、今後の日本のゲルマニスティク反省の一材料にもなるかと思われる。またそれとともに、かつてドイツでは際物であるとはげしく誹謗されもしたヘッセの文章が、この国ではとりわけ称揚されたというのも、興味を呼ぶことである。ヘッセはアメリカでは、ドイツの他の作家たちとは対蹠的に軽やかな流麗な文体で書く作家として、一般に評価が高いが、これが彼の根強い人気を支える秘密の一つにもなっている。

1960年代の終わりから70年代の初めにかけて絶頂点に達したアメリカのヘッセ・ブームは、今なおかなりの出版部数を保って持続している。ここでのヘッセはまず第一に「アウトサイダー」として発見されたが、特に共感を呼んだのが、その「内面への道」に立脚した反権威的態度・反物質主義・道徳主義的政治性であった。かつてイギリスの評論家ウィルソン（Colin Wilson）は、その衝撃的な著書『アウトサイダー』（*The Outsider*, London 1956）の中で、「同時代の大家トーマス・マンとちがってヘッ

せには人物を生き生きと描く力がないが、観念はマンよりもはるかに生きている』と述べたが、その明証がおよそ10年後のアメリカで得られたわけである。ジオルコウスキーもまた、ヘッセの人気の秘密について考えたが、彼は文学的な尺度はヘッセの読者には適用されないとし、ヘッセ流行の現象は、美学上のものであるよりもむしろ文化的なそれであると見た⁸。ひたすら個人主義に徹する彼において人々が特に魅了されるのは、混沌と牧歌的なものとの融合であり、無政府主義的なものと、ドイツ本国では近来むしろ頃に評判のわるいドイツ的「内面性」との混和である。そしてその名声の行きつくところ、ついにヘッセはアメリカ女性の頭の中を、結婚・子供・ピル・クルマ・家具・ダンス・食事と並んで占めるにまで到ったと言う⁹。つまりヘッセはこの国では、「或やり方で『アメリカ的』な作家になり、彼の作品の或ものは、言わばアメリカ的な文化現象になってしまった」¹⁰のである。

さて翻って、BRDにおけるヘッセ受容史において見逃すことのできないものの一つに、1957年にデシュナーが行なったヘッセの文体攻撃(Karlheinz Deschner, *Kitsch, Konvention und Kunst, Eine literarische Streitschrift*, München)がある。文体の問題は、外国文学研究の場合もっとも厄介なものの一つだが、私自身の従来の考察をこの機会に更に深めることにしたい。拙論の後半で多少具体的に触れる手筈である。ところでこの同じ1957年に、アメリカでは文化面での新方針が樹立され、それがやがて、ヘッセ歓迎の基盤としての、60年代における或種の新しいロマン主義運動の興隆へと続いていくのであった。

アメリカにおけるヘッセ受容の最近の状況において最も強く私の関心を誘うものの一つは、ドイツにおいてはしばしば、余りにもドイツ的であるとして拒否の対象になってきた彼が、そこでは大部分の者にとって、反対に非ドイツ的と受け取られている事実である。その素朴さやユーモアや軽快さ(!)からして、平均的アメリカ人から見た典型的なドイツ人タイプ

とは裏腹の存在として、ヘッセはこの国では、彼が明らかに受けついでいる特にドイツ的な或伝統を、ドイツ的なものとしてはそのまま一般に認識されることがなかった。ヘッセの中にあるドイツ的・ロマン主義的伝統をまるで認めようとしなない立場には、私としてはむしろ強い疑念を向けざるを得ないが、しかしこのような新しい発想は、旧来の文化のしがらみから容易に抜け出したいドイツ内部からは到底生まれ得ないものであり、淀んだ汚水の中で跳き続けるドイツ本国のゲルマニスティックに対する一つの挑戦状として、その斬新性を私はむしろ積極的に買いたいと思う。そこではヘッセは、「現実の諸要請と、いわゆる実存的に対決」¹¹する作家として把握され、更に一般的に「東方的」な色彩の宗教性も具えた存在として、アメリカにおける彼の影響はドストエフスキーのそれに匹敵するものであった。これらの点において、この国におけるヘッセの読者数は、文学を学ぶ者たちなどの間によりも、むしろそれ以外の精神科学のさまざまな領域の中でのほうが、より多く認められるようである。いずれにしても、ジューグリト・マイヤーが、「近來のドイツのヘッセ批評は、アメリカのすぐれたヘッセ研究の水準よりも遙かに下廻る」¹²と誇らかに述べているのも、さまざまな問題を提起する数々の業績を生み出してきたアメリカの、ヘッセ研究の活況を思い浮かべるとき、また宜なるかなと言わざるを得ない。

3

さてカナダやイギリス本国がアメリカの影響を強く受け、ヘッセ受容においてもこれと似通った現象を見せるのは理解し易いことである。カナダでも、ヴェトナム戦争に対する反対運動や麻薬の問題などがヘッセ「流行」と無関係ではないが、更にヘッセの「アンチ・ジャーマニズム」やアウトサイダーの本質などが読者に強くアピールしたようだし、アメリカでと同様この国でのヘッセは、BRDにおけるよりも、総じて政治的観点か

らの把握が目立っているように思う。また英国はもともと C. ウィルソンの母国として、アウトサイダー的ヘッセの震源地だが、ヘッセの作品と並んでその人間性にも、一般の強い関心が寄せられているようである。この人間性重視の傾向は更にイタリアにも見られ、そこではとりわけ賢者としてのヘッセがたたえられているが、その人間的良心の証人としての側面や、また平和主義的態度という側面の強調が認められる。同様のことは北欧のスエーデンでもうかがえるが、そこでもヘッセの人格に対する尊敬の念が強く看取できるのである。

フランスにあっては、アメリカの場合とは事情が大いに異なって、ヘッセの作品の受容の歴史はかなり古く、しかも余り時代の変動には左右されず、ほぼ一貫して肯定的な評価を得てきたが、そこでもまたロマン・ロランやアンドレ・ジードなどとの深いつながりを通じて、やはりヒューマニスティックな評価が重きをなしてきたようである。またフィンランドでもヘッセは、ドイツ文学における最も知名度の高い代表者として、その強烈な個性尊重の精神が読者一般に深い感銘を与えているが、ただここでは面白いことに、アメリカなどとは対照的に、ヘッセはひたすら非政治的に自我を追求する作家として、読者の偶像的存在となっているらしい¹³。またソ連においてもヘッセは今日、今世紀最大のドイツ人作家の一人としての評価がゆるがず、殊にそのヒューマニストとしての政治性は大いに注目を浴びているが、また広範な読者層の支持を得ている点で、或面ではアメリカや日本、更には現在のBRDなどでの状況を思わせるものを持つようである。他では、同じくヘッセの作品が頗る愛好されている国として、たとえばユーゴスラヴィアの名前を逸することができないが、ただここでは、アメリカなどとは異なり、ヘッセが知的読者層の、言わば古典的な愛読の対象となっていて¹⁴、むしろ日本の事情とどこか相通じるものを思わせる所にその特徴があると言えよう。

翻って、西洋諸国から目を転じてアジアの国々の状態を瞥見するなら

ば、まずインドでは、もともとゲルマニスティックの歴史が極めて浅く、従ってヘッセの作品も、『シッダルタ』(Siddhartha) 以外は殆んど問題になっていない。また中国語圏においても、台湾を除いては、ヘッセがシンガポールでかなり読まれていることが、やや目につく程度である。ただ上記の台湾や、また韓国でのヘッセの位置は頗る高く、そのどちらの国においても、ヘッセは西欧の作家の中でも、愛読の対象としては最上位を占めているようである。なおその場合に、共通して際立って認められることは、それらの国でのヘッセへの強い傾斜が、彼の、「東アジア的」と受けとめられる精神的態度への惜しみなき共感に、多く基いているらしいことである¹⁵。この点は、日本の読者の場合にもしばしば問題になりうる所であるが、上の両国においては、これが更に著しく増幅されているとの印象が強い。そこには今後 追求すべき問題点が 多々含まれているとの感を深くする。

以上のような諸外国における例との対比において、日本におけるヘッセ受容にまつわる諸問題も、おのずからその輪郭を徐々に鮮明化してくるように思われる。

わが国でのヘッセ受容史を概観するとき、まず目につくその大きな特徴は、かなり長い期間にわたる経過の中で、受容の波に大きな起伏が全く見られないことである。勿論これは一般のヘッセ愛好家の場合のことであって、ゲルマニストにあっては事情は当然ながら大きく異なるし、また一般の読者においても、ヘッセ受容の内実では、微妙なニュアンスの変動が絶えずあったことは言うまでもないが、その大筋においては、やはり上のように述べて一向に差しつかえないものであると思われる。ヘッセの愛読者たちは、彼のひたむきな求道者的な姿勢に最もはげしく心をゆすぶられるのであり、その包み持つ「内面」の世界は、相変らず心温まる魅力と香わしい匂いとを失っていない。その意味では、わが国には「ヘッセ・ルネサンス」など無かったのである。

ヘッセの内なる「内面性」が、ドイツにおいては数十年このかた、少なからぬ評者たちから、時代おくれの垂流的なものとして酷評を受けてきたのに対して、それは日本では依然として新鮮さを失わず、この点において、日本人の場合のほうが、ドイツの文学的伝統に対して遙かに深く意識が行きとどいていると見る説¹⁶を、現在の私は正しいと考えている。言うまでもなく、従来わが国におけるヘッセ受容のあり方には数多くの問題があった。と言うよりも、むしろそのことこそが、拙稿執筆のそもそもの出発点だったのである。だが国情も国民性も大いに異なる他の国の姿勢を、私たちが軽々に取り入れようとするのは、およそ無意味なことである。すべては貴重な参考資料となるが、しかし、たとえば無批判にアメリカ的な方向を取り入れようとするのも、また主体性を無くしてドイツのゲルマニスティックの方向に追随しようと努めるのも、共に等しく愚かで滑稽なことではあるまいか。そしてこのさい殊に私たちが警戒すべきは、ドイツ本国におけるヘッセ対処の大勢に、簡単には引きずられてしまわないようにすることだと思う。日本語訳によるヘッセの作品の莫大な出版・販売量とは裏腹に、日本の大学では、今もってヘッセの真価が、十分な資料・研究の裏付けを得たうえで、本格的な論議の対象となるのは稀有のことである、と言えるのでなかろうか。このヘッセ忌避の態度において、日本のゲルマニストの趨勢は——繰り返しを恐れず再び敢えて述べるが——、またしてもBRDのゲルマニストたち大方の従来動向に従っているように思わざるを得ない¹⁷。

4

BRDのヘッセ受容史において見過ごすことのできないものとして、ここでは、第二次大戦直後から1950年代末にかけての推移の中から、言わば象徴的に三つの具体的な現象を把え、概略的ながら触れておきたいと思

う。その第一は、1947年の、クルチウス（Ernst Robert Curtius）による、ヘッセの作品における叙事性の問題視、第二は、先述のデシュナーによる、ヘッセをドイツ・ロマン主義等の亜流だとする、言語的な面での惨殺、そして第三は、1958年に *Der Spiegel* 誌上で行なわれた、政治的人間としてのヘッセに関する、敵意のこもった分析である。

まず第一のクルチウスの場合だが、彼のヘッセ論は初め雑誌 *Merkur* に発表された¹⁸。クルチウスはの中で最初に、テーマ選択に対するヘッセの若干の具体例について短評を行ない分析の筆を進めたのち、本題としてのその論評にはいつている。さてこの本題に先行する序論の部分で、クルチウスは『デミアン』（*Demian*）に触れ、それまでドイツの青年たちにとって遠い存在になってしまっていたヘッセの作品が、1922年に彼の『デミアン』が現われて¹⁹、灰緑色の軍服姿の学生たちがじかに呼びかけられて以来、その持つ意味を、まるで魔法の一撃によってのように変えたとあるくんだり²⁰、極めて印象的である。デミアンは、死を前にして、傷ついた友に言うのである。「小さなジंकレール、聞きたまえ。僕は去って行かねばならないだろう。君にはひよっとしたら、いつかまた僕が必要になるかも知れない。……そのとき僕を呼んでも、もう僕はがさつに馬に乗ったり、また汽車に乗ったりしてやって来はしないよ。君はそのときには、君の心の中の声に耳を傾けなければならない。すると君は気づくのだ。僕が君の中にいるということに。」²¹ この「素朴であると共にまた深みのある知らせ」について、クルチウスは述べている。「ヘッセの作品の中の何ものも、この言葉には匹敵し得ない。このような言葉はただ一度しか言うことがないものなのだ。」

さて続く本論においてクルチウスは、自分の「試論」が、ヘッセの著作全体の評価を目的とはしていないということ、多くの重要な文献が入手しがたいという理由からもそれは不可能であることを断りつつも、ヘッセの

主題ならびに技巧の分析を進めていく。これがクルチウスによれば、或作家を解釈するための唯一の適切な作業なのである。この点から見て、たとえばジョイスやプルーストは、明らかに一つの客観的な現実世界を構築した。彼らの作品にあっては、或なまの「体験」が物語られるのではなく、執筆者自身から解き放たれた一連の形象と人物とが描かれている。それらと比較して、ヘッセの作品の場合はどうか²²。

クルチウスによれば²³、ヘッセの場合、上のようなことはただ『ナルチスとゴルトムント』(*Narziss und Goldmund*) の中でしか起こらない。その他の作品はすべて「自伝的なエクトプラスマ」(単細胞生物原形質外層)であり、「移調された『経歴』」である。ヘッセには、そもそも文学一般に対する不信の念がある。(「私には今日のドイツの作家たちの——私自身のをもちろん含めて——、純粋な造形と本物の作品とへの試みが、いつも、ただ何かしら不十分で垂流のものであるに過ぎないように感じられる。……私はこの文学が、告白的にかれ自身の苦悩とその時代の苦悩とを、できる限りの誠実さを以て言い表わしている点に、過渡期文学の価値、つまり、不安なものとした文学、問題をはらむようになった文学の価値を認めるのである。』²⁴) しかも更にヘッセは、この文学という手仕事の、さまざまな要請としての文体とか文章法などに対して、真剣に配慮する姿勢を示していない。彼の言葉は時に無邪気で、時に未熟である。またヘッセの夥しい量の抒情詩をとってみても、その多くは、長々と懸命に韻を合せただけの代物に過ぎない。……

このように齒に衣着せずヘッセ批判を行なったクルチウスだが、その彼も実は序論において、先にも拙稿の中で少しだけ言及したことだが、『ナルチスとゴルトムント』は絶賛している²⁵ ことを、見過ごしてはならない。この作品は10年後に、文体のうえで、かのデシュナーのすさまじい攻撃を集中的に浴びることになるのであるが、なおまた今一つ考えるべきことは、実はクルチウスのこのヘッセ論全体の意図が、ヘッセの最後の大作

『ガラス玉遊戯』(Das Glasperlenspiel) 称揚のための、必要な手続きに他ならなかったという事実である。クルチウス自身が「喜ばしい驚き」²⁶であると語った、内容と規模から見て極めて重要なこのヘッセ老年の作品に関するクルチウスの論評を、トーマス・マンは1947年11月25日付ヘッセ宛の手紙の中で、『ガラス玉遊戯』についてこれまでに書かれた論文の中で、おそらく最良のものだと称賛している²⁷。ただし同じ手紙の中でマンが、チューリヒで直接会ったクルチウスのことを、上記にすぐ続けて酷評していることも、目にためておきたい。マンは彼のことを、『ナルチスとゴルトムント』評価以外の点ではその話はあまり得る所が無く、政治的には全く聞くべきものが無い、そこには、第三帝国の存続中ずっとドイツ国内にとどまり、しかも不快な悲しい思いをした人たち殆んどすべてに認められる種類の、少なくとも部分的な知的萎縮、いや知的貧困化さえ認められると記しているのである。

ヘッセに関するクルチウスの、マイナス評価の部分について、紙数の関係で私にはいま自ら詳しく論評する余裕が無いが、主題論・技巧論では、本来ロマンストである彼が、どうも無いものねだりをしているように思われてならない。彼の論法を進めて行くと、ついには、従来ドイツ文学の魅力ある特質の一つと考えられていたものの大部分が、消え去ってしまうことにならないであろうか。また表現技術上の点では、ドイツ語を母国語としない私には論ずる資格など無いかとも思うが、先述のアメリカでの激賞のことは措くとして、ドイツ語圏においても、ヘッセの同一表現が実際には毀誉両様の対象になってきたのであるから、その点からも、クルチウスの大まかな裁断にそのまま靡くなど到底できないことである。これは、多年ヘッセの著作に、常に批判的な気持を失わぬよう努めながら親しんできて、その長所も弱点も、近頃ようやく自分なりに或程度までつかめる段階に達したように思える私自身の、単なる「身最良」などではない筈である。ヘッセの文体を賞賛する作家や評論家の数も極めて多く、トーマス・

マンやハンス・マイヤー (Hans Mayer) などを始めとして、その名を
列挙するのに苦勞することは全くない²⁸。なお、クルチウスに関すること
では最後に、ヘッセが1947年7月ごろ Robert Engelsmann に宛てた手
紙の中で、クルチウスの上記の論文に言及している個所があるので²⁹、簡
単に付け加えておきたい。ヘッセは其中で、かつては率直で自由な心情
の持主だったクルチウスも、ヒトラー時代の困苦欠乏のため、すっかり拗
者になり品性を落としてしまった、しかし彼が私のことを、何も知らない
で悪しざまに書いていることを、自分はわるく取りたくない、世間ではも
っとひどいことが起こっているのだから、私たちはそんなことは黙ってや
り過ぎよう、と述べているのである。

さて1957年、ちょうどヘッセ80歳の誕生日に、今度はデシュナーの、極
めてセンセーショナルなヘッセ論難の、例の書物が現われた。ヘッセを並
流の作家と見るこの若き評論家の、ヘッセの言語像と文体的特性に対す
る、微細な点に及ぶ、独特で派手な、いわゆる実証的態度には、たしかに
何か新風を呼び起こすかと思えるような、或種の魅力も伴っていたことは
否めない。これによって無論ヘッセの「息の根がとまった」わけでは決し
てないが、しかし、それまでも低迷していた、ヘッセにまつわるさまざ
まな偏見について、デシュナーは自分の読者に、何か理に適ったものであ
るかのような印象を与えやすいその言語批判術によって理論的根拠を付与
し、そのことによって上記の偏見をいっそう強めて広範囲に及ぼした。そ
の限りにおいては、世人のヘッセに関する知的評価に、少なからぬ影響を
与えたと見られるのである。

デシュナーは、『ナルチスとゴルトムント』の中から極めて多数の文例
を見本として取り出し、列挙したのち、次のように述べている。「ここに
見られるのは……わるい文体である。この文体と結び付いているのは、い
ちじるしく非創造的で紋切り型の言葉である。この言葉は、ヘッセの本が

出る 100 年も前にドイツのロマン主義において、すでにもっと説得性をこめて用いられた。……ヘッセは、バル [=Hugo Ball] が非常に正確に定義づけたように、〔ドイツ・ロマン主義の〕輝かしい隊列の中の最後の騎士、従って遅参者、余韻であり、いくつかの書物の中で、特にまたその抒情詩において、決定的な亜流の徒である。』³⁰ (〔 〕内は筆者注。)

文体・言語の面で悪罵に終始したデシュナーの論鋒は、更に上記の小説における人物像にも向けられるが、特に同書第 4 章の中の、主人公の一人であるナルチスが芸術家の本質について語っている部分を引用して、これは人間を知性型と感覚型に峻別する極めて安手の論法であって、そのような図式的な人間はこの世に存在せず、単なる作り事に過ぎないと断じている。そして以上のように具体的にくだしたマイナス評価をとりまとめ、これにデシュナーは Kitsch なる概念を適用したのであった。

このデシュナーの論難の書については、特にその出版の直後において、賛否両様の立場からの論議がかまびすしく、一時は相ついで *Frankfurter Allgemeine Zeitung, Die Zeit, Stuttgarter Zeitung, Der Spiegel, Bücherei und Bildung* 等、新聞や雑誌の紙面を賑わしたのだが、今はそれらの争論の内容に触れる余裕が無いので、その紹介は次の機会にゆずることにした。

それはともかく、表現の件に関して、『ナルチスとゴルトムント』やヘッセの抒情詩のそれが、精彩を放つものかどうかの論議はしばらく措くとしても、デシュナーの言うように、ヘッセをロマン主義者たちの単なる亜流と簡単に結論づけるのは、いかななものであろうか。ジョルコウスキーも、「方法論上の或構成が、それ自体ではまだ何ら価値評価を示すものではないことは明白である。たとえば文体の模倣を、芸術的な能力の欠如に基づく非創造的なものとするべきか、あるいは、自主性を持ちつつも遊びを喜ぶ気持から出た独創的なものと見るべきか、——この問題は、場合に依じて決定しなければならない。なぜなら、方法論の立場から見れば、こ

の二つの模倣は本質的に同じなのであるから」と述べている³¹。私はこの所説のほうを採りたいと思う。そして更に、文学作品にとっては表現技法がすべてだとするデシュナーの立場からすれば当然のこととはいいながら、彼がその著書の中で、ヘッセの当該小説において大きな関心事であるべき両極性・母・芸術家等の諸問題に対し、全く一顧だに与えていないのは、やはり不自然さを感じさせる処理法だと言わざるを得ない。プファイファーも指摘するごとく³²、そこには、素材と形式と内容との総括的な検討の試みはまるで見られず、明らかに読者を一面的に操作しようとする評者の意図がはたらいているように、私には思われる。そしてヘッセも、彼自身の作品のこれ以後の版において、デシュナーによって批判を加えられた個所のどれ一つに対しても変改の手を入れなかったということを³³、この件の終りに書き添えておきたい。

1958年7月9日付の *Der Spiegel* (Jg. 12, H. 28) 誌上に、『菜園のヘッセ』(*Hermann Hesse im Gemüsegarten*) と題する、悪意のこもった無署名の一文が出た。ヘッセはここで今度は笑いものにされ、内向的・非政治的で酔狂な、モンタニョーラの「日曜園芸家」として指弾を受けた。この場合のヘッセは、世俗には全く背を向け、ひたすら自分一個の世界にのみ閉じてもって生きる存在、つまり、悪意をもって解された、かの「内面性」の代表的な担い手として描かれている。外では核分裂や内外の政治やジャズ音楽や火酒など、混乱の世界が渦巻いているというのに、ヘッセは相も変わらず、永遠のもろもろの価値と称するもの、つまり生成と消滅、パンと葡萄酒、そして心の奥底の声などに耽っているというのである。論者はこのように述べて、ドイツにおいてこれまで深い敬意を受けてきた、ドイツ特有の内面的な詩作と思索とが、数百年このかたドイツの文学を「世界文学」の舞台から閉め出させた元凶であるとした。

だがヘッセが政治問題に無関心であったところか、それこそ思索と詩作

の世界でこれと常に真摯にかかわり続けてきたことは、たとえば『荒野の狼』(Der Steppenwolf) や『ガラス玉遊戯』のような作品を味読するだけでも想到し得ることであり、更には彼の数々の政治評論や書簡等、その気になりさえすれば、これを容易に立証する材料に事欠かない。またジャズやシュナップスのたぐいにしても、『荒野の狼』のような作品の世界を連想しただけでも、ヘッセがそのような領域からあくまで隔絶した世界に生きていたと考えるのは、悪意に基づく偏見であるとしか言いようがない。近時ヘッセの「政治性」がまずドイツの外で高く評価され、それがまたドイツにも波及したことは、今では広く知られた事実である。ヘッセ自身も1951年に、或手紙の中で次のように書いている³⁴。「私は自分の発展の過程において、時代の問題から遠ざかりはしなかった。そして、私の政治上の批判者たちの意見とは違い、象牙の塔にこもって生活したことは一度もない。だが私にとって第一の、焦眉の問題が国家や社会や教会であったことは決してなく、それは個々の人間、人格、一度かぎりの、規制されない個人なのであった。」

また「内面性」の問題についても、1945年に行なわれたトーマス・マンの連続ラジオ講演『ドイツとドイツ人』(Deutschland und die Deutschen)の例を持ち出すまでもなく、ひとたび方向を誤れば、この光輝ある特性も罪と破滅に導くものであることは、近い歴史が明らかに示すところだが、しかしまたヘッセの他ならぬこの「内面性」の側面が、今回の「ヘッセ・ルネサンス」を招来した大きな基盤ともなっているという、ややこみいった事情も忘れてはならない。既述のごとく、ドイツでは往々にして余りにもドイツ的であると取られかねないヘッセその人が、他の国では、稀に見る極めて非ドイツ的・国際的なドイツ人作家と看做なされる可能性もあるわけである。

さきのデシュナーの場合もそうであったが、この『シュピーゲル』誌の攻撃文に対しても、ヘッセの反応は諦めの調子を帯びていた。彼の長男ブ

ブルーノ (Bruno Hesse) の記すところによれば³⁵、ヘッセはその年の秋ブルーノに向かって、『シュピーゲル』の記事について次のように語ったそうである。「私について書かれたことはもう全くの作り事である。いってみれば宣伝の原則に従ってされたことだ。……その背後には、一種の怠惰がひそんでいる。人の心に呼びかけることがらを、新しい事や未知のことの中に自分で探すかわりに、もう成功していることを取り上げるほうがらくなのだ。……トーマス・マンが暫らく『成功者』のこの地位を占めていたあとで、私がこの立場におかれたわけだ。」また別の機会に、同じくブルーノに対してヘッセは以下のように述べたという。『『シュピーゲル』ではこういうことはいつものことなのだよ。毎週いわゆる名士の一人が処刑されるのだ。今度は私の番だった。」「……私には〔雑草をひき抜くことは〕ちっとも退屈に思えない。この仕事は、何も特別な注意を必要としないので、冥想をするには非常に都合がよい。『ガラス玉遊戯』の大部分は庭でこの仕事をしながら出来たのだ。」これらの言葉は、この問題に対するヘッセの立場をよく理解せしめる発言だと思うが、さしずめあの記事は、ジャーナリズムの「無節操」を長年にわたって事毎に非難してきた老作家に対する、一ジャーナリストの報復であったとも見ることができよう。或手紙³⁶の中でヘッセ自身、『『シュピーゲル』の記事は自分には興味が無い』と述べている。

この稿の最後にあたって今一つ、1960年代の半ばから70年代の初めにかけてBRDで吹き荒れた学生運動の、担い手たちの間におけるヘッセ受容についても、上記の政治問題とからめて、どうしても述べておかねばならないところだが、ここで文字どおり紙数も尽きた。「議会外野党」、「絶対拒否者グループ」、「潜在的不満者グループ」等々の、ヘッセとの具体的な関わりについては、他日また稿を更めて扱うことにする³⁷。

注

煩を避けるため、以下 Hermann Hesse はすべて H.H. と略記した。

- 1 Egon Schwarz, *H. H., die amerikanische Jugendbewegung und Probleme der literarischen Wertung*. In: *Basis I*, Frankfurt a. M. 1970, S. 127. (ただし, Franz Baumer, *Deutschland*. In: Martin Pfeifer, *H.H.'s. weltweite Wirkung, Internationale Rezeptionsgeschichte*, Frankfurt a. M. 1977, S. 17 による.)
- 2 この点に関連して、事情を示す一つの象徴的な例として、次のような一文が私の興味をひいた。「むしろあの理屈っぽい〔ドイツの〕学生たちが何ごとかを議論している光景の中に透明なヘッセの作品を置いてみることは、ひどく不似合いですらある。ヘッセは現代ドイツに支配的である前衛的なもの、あるいは尖鋭的な政治意識にふれることのあまりに少ない作家であり……」(玉置保巳『ヘッセの読まれ方——生誕百年によせて』1977年11月26日付朝日新聞夕刊。〔 〕内は筆者注。)
- 3 Theodore Ziolkowski, *Das Nachleben der Romantik in der modernen deutschen Literatur, Methodologische Überlegungen*. In: Wolfgang Paulsen, *Das Nachleben der Romantik in der modernen deutschen Literatur*, Heidelberg 1969, S. 15—31.
この中で評者は、類型論的に見たロマン主義の特徴として、René Wellek を援用 (*Romanticism Re-examined*. In: Stephen G. Nichols, Jr., *Concepts of Criticism*, Yale Univ. Press, 1963) し、次の三つを挙げている——1) ロマン主義は文学を、人間の認識の、主要手段と看做す、2) ロマン主義は自然を、自我と世界という二元性、主体と客体という二元性を、残す所なく揚棄する一つの有機的な統一体と考える、3) この有機的な統一体を把えて認識する文学は、神話・象徴の文学である。(S. 23) そしてジオルコウスキーはヘッセを、ホーフマンスタール、リルケ、オスカル・レールケ、トーマス・マンなどをと同じく、類型論的=ロマン主義的な精神が、歴史上のロマン主義への好意的な受容態度と結合する、現代作家の一人として数え上げている。(S. 25)
- 4 Walther Rehmの名著 *Der Todesgedanke in der deutschen Dichtung vom Mittelalter bis zur Romantik*, Halle 1928 の跡をうけて、この問題を扱った好著に、Christian I. Schneider, *Das Todesproblem bei H. H.*, Marburg a. d. Lahn 1973 がある。
- 5 Martin Pfeifer, *Deutsche Demokratische Republik*. In: Pfeifer, a. a. O., S. 56.
- 6 Rudolf Koester, *USA*. In: *ibid.*, S. 155.
- 7 Wilson, a. a. O., S. 68 (『アウトサイダー』福田恒存・中村保男訳 1957年; 第23刷 1966年 紀伊国屋書店 62ページ参照)。

- 8 Ziolkowski, *Saint Hesse among the Hippies*. In: Thomas Weyr, *American-German Review*, Vol. 35, No. 2, Philadelphia 1969. (Bernhard Zeller, *H. H. 1877・1977. Stationen seines Lebens, des Werkes und seiner Wirkung*, Stuttgart 1977, S. 387 による.)
- 9 *Time*, Special Issue: *The American Woman*, New York, 20. 3. 1972. (Zeller, a. a. O., S. 389 による.)
- 1962年8月12日の *Die Zeit* 紙上で、数日前マリリン・モンローが死んだときは高名な評論家たちが競って、これを悼む筆を執ったが、それに反して、8月9日に亡くなり11日に埋葬の終わったヘッセの死は、一片の死亡広告によって悲しまれたに過ぎないと書いた Rudolf Walter Leonhardt の記事と、上の記事とは、何と著しい対照を示していることか。
- 10 Sigrid Mayer, *Die Hesse-Rezeption in den Vereinigten Staaten*. In: Heinz Ludwig Arnold, *Text+Kritik* 10/11, *H. H.*, München, Mai 1977, S. 86.
- 11 *Ibid.*, S. 96.
- 12 *Ibid.*, S. 98.
- 13 Keijo Immonen, *Finnland*. In: Pfeifer, a. a. O., S. 100.
- 14 Slobodan Grubačić, *Jugoslawien*. In: Pfeifer, a. a. O., S. 116.
- 15 Adrian Hsia, *Der chinesische Sprachraum*. In: Pfeifer, a. a. O., S. 250.
- u. Inn-Ung Lee, *Korea*. In: Pfeifer, a. a. O., S. 272.
- 16 Masaru Watanabe, *Japan*. In: Pfeifer, a. a. O., S. 231.
- 17 Vgl. Thomas Beckermann u. Keizo Miyashita, „*Irgendetwas Unnennbares, wahrscheinlich Morgenländisches*“, *Anmerkungen zur H.-H.-Rezeption in Japan*. In: Arnold, a. a. O., S. 108. (「自分がヘッセを読んだのは、ヘッセと共に生きるためであって、ヘッセについて考察するためではない」という、学生たちの〔研究テーマとして取り上げることへの〕拒絶に照応しているのは、ヘッセに関して、また彼の全作品に対する本格的な学問的分析に関して、大学ではあまり教えられていないという事情である。」ただし、〔 〕内は筆者注.)
- 18 E. R. Curtius, *H. H.* In: *Merkur*. Jg. 1, 1947, H. 2. のちにこの論文は、彼の著書『ヨーロッパ文学批評』に収められた。拙稿の引用はこれによる。(Curtius, *Kritische Essays zur europäischen Literatur*, Bern 1950 ; 3. Aufl. 1963.)
- 19 この年数は誤りではなかろうか。実は『デミアン』は初め匿名で1919年に出版され、翌20年の第9版以後は実名で出るようになった。
- 20 Curtius, a. a. O., S. 152—153.
- 21 H. H., *Gesammelte Werke*, V, Frankfurt a. M. 1970, S. 162.
- 22 ジョイスの名前がここで出たので、ヘッセの『荒野の狼』を評した、トーマス・マンの次のような言葉が連想される。「『荒野の狼』が、実験的な大胆さにおいて『ユリシーズ』や『贖金つくり』〔ジード〕に劣らない作品であることを、今更言

- う必要があろうか。」(Th. Mann, *H. H. zum siebzigsten Geburtstag*, 1947. In: derselbe, *Gesammelte Werke*, XI, Berlin 1956, S. 258. [] 内は筆者注.)
- 23 Curtius, a. a. O., S. 160 ff.
- 24 H. H., *Die Nürnberger Reise*. In: H. H., *GW.*, VII, S. 154.
- 25 Curtius, a. a. O., S. 157.
- 26 Ibid., S. 162.
- 27 Anni Carlsson, *H.H.-Thomas Mann Briefwechsel*, Frankfurt a. M. 1968 ; erweiterte Ausg. (v. Volker Michels), 1975, S. 193—194.
- 28 Vgl. Volker Michels, *Über H. H., Erster Band* (1904—1962), Frankfurt a. M. 1976, u. *ibid.*, *Zweiter Band* (1963—1977), 1977 usw.
- 29 Vgl. Zeller, a. a. O., S. 346.
- 30 Deschner, a. a. O.; 101.-115. Tausend, 1965, S. 103—104.
- 31 Ziolkowski, a. a. O., S. 29.
- 32 M. Pfeifer, *Erläuterungen zu H. H.'s. Erzählung „Narziß und Goldmund“*, Hollfeld/Obfr., S. 53.
- 33 Zeller, a. a. O., S. 347.
- 34 Vgl. Volker Michels, *H. H., Leben und Werk im Bild*, Frankfurt a. M. 1977, S. 199.
- 35 井手貢夫 『心の旅』(北海道ヘルマン・ヘッセ協会会報) 第3号 1977年4月1日 8ページ, ならびに, 同第5号 1978年1月20日 7ページ, による.
- 36 Georg Schwarz 宛, 1958年7月末. (Zeller, a. a. O., S. 383 による.)
- 37 今の問題については, 次の文献が貴重な示唆を与えてくれた: Hans Joachim Stein, *H. H. —wer liest ihn heute und warum?*, 天理大学学报 第101輯 1976年 所載, ならびに, ders., *H. H., die „Außerparlamentarische Opposition“ und andere Außenseiter* (Manuskript).

Fragen in der Hermann-Hesse-Rezeption

Hiroyuki Fujii

Als ein Glied des Studiums der Hermann Hesse-Rezeption versuchte ich diesmal, die Rezeption in Japan mit deren Geschichte und jetzigen Verhältnissen im Ausland zu vergleichen. Außer in Deutschland und Japan begann die ordentliche Hesse-Rezeption in den meisten Ländern erst mit der Verleihung des Nobelpreises für Literatur an ihn (1946). Japan ist also ein Vorläufer in diesem Gebiet, da die dortige Hesse-Rezeption schon vor dem letzten Weltkrieg ihren ersten Höhepunkt erreichte. Hesse war und ist bei dem japanischen kulturellen Klima und der japanischen Gemütsart ganz eingewurzelt.

In vielen europäischen, amerikanischen Ländern bringt man die Achtung nicht nur seinem Werk, sondern besonders seiner Person entgegen wie in Japan. Der humanistische Standpunkt von ihm als einem Dichter des Individualismus in höchster Potenz wird als eine Lebenshilfe unter seinen Lesern zukünftig auch stets ernst genommen werden. Bemerkenswert ist die völlige Einflußlosigkeit der deutschen und amerikanischen Kathedergermanistik auf die literarische Kritik zu Hesse in den USA, was in Japan vollkommen anders ist. Was die Hesse-Kritik angeht, schwammen die meisten Germanisten und Rezensenten in Japan mit dem Strom der Hochschulgermanistik in der BRD nach dem Zweiten Weltkrieg. Daher entstanden bei uns in Japan zwischen den sehr weiten Lesekreisen Hesses und den Fachleuten auffällige Meinungsverschiedenheiten, und zugleich ergab sich, daß auch die Hesse-Leser es oft an völligem Verständnis für ihn fehlen ließen, da die japanischen Germanisten keine aktive

Haltung zu ihm einnahmen. Das Bild von Hesse in den USA usw. sollte in Japan noch stärker als gute Information dienen, sein Bild als eines politischen Outsider-Fahnenträgers, dessen Sprache eine seltene Begabung zeige, schwierige Probleme präzise und einfach darzustellen. Es gibt aber auch Länder, wo Hesse als ein unabhängig seinen „Eigensinn“ verwirklichender Dichter zu einem Abgott gemacht wird oder als Klassiker des akademischen Publikums einzuordnen ist. Die tiefe Neigung zu Hesse in Taiwan oder Korea steht meistens seiner „ostasiatischen“ Geistigkeit mit Sympathie gegenüber. Solche Meinungen in diesen Ländern haben mehr oder weniger etwas Gemeinsames mit Japan.

Es macht sich bei uns bemerkbar, daß in der BRD der siebziger Jahre anscheinend die Seite eines romantischen Anarchisten in Hesse im Brennpunkt des Interesses seines Lesers zu stehen beginnt. Auf die Herabsetzung Hesses wirkten in der Vergangenheit verschiedenartige Vorurteile stark ein, deren Hintergründe zu untersuchen unbedingt erforderlich ist, damit dies auch zu einer Richtungsänderung der japanischen Germanisten führt. Der Infragestellung thematischer und technischer Qualitäten in Hesses Werk durch Ernst Robert Curtius (1947) und dem polemischen Angriff Karlheinz Deschners (1957), Hesse sei ein epigonenhafter, sprachlich schlechter Schriftsteller, folgte 1958 die für viele Jahre das Hesse-Bild bestimmende Attacke gegen den „apolitischen“ Hesse. Diese Ansichten sind alle ganz einseitig; sie verstehen Hesse nicht gut, und sonst zielen sie auf etwas Sensationelles und Popularität.

Es wäre für das Hesse-Studium in Japan sehr wünschenswert, daß man unabhängig seinen eigenartigen Weg einschlägt, indem man jedoch zugleich die Situation der Hesse-Rezeption in der Welt stets zu Rate zieht.